

# 上級英語ゼミ特別編

## 仮定法入門

● 石田和彦 著



仮定法とはどのような表現か？

なぜ、仮定法は一つ古い時制を用いるのか？

仮定法の「謎」にトコトン迫ってみました。

高校生必読の講座です。

考える学習をすすめる会

## 0. 仮定法とは…

「もし～ならば」という仮定の表現。

日本人はあまり意識しないが、英語では、「もし～ならば」という仮定を2通りに分ける。1つは「**現実味のある仮定**」、もう1つは「**絶対に起こりえない仮定**」。前者は「もし明日晴れたら」、後者は「もし私が鳥だったら」のように。

つまり、英語では「仮定」した事柄が起こる可能性の有無によって、言い方を使い分けるのだ。

### 直説法 …… 現在の事実、または実現の可能性があるときの言い方

何のことはない、フツウの言い方。現在のことは現在形で、過去のことは過去形で表す。

- ① If I have enough money, I will buy a new car.  
(もし～ならば 私は 持っている 十分な お金を, 私は ~だろう 買う 1つの 新しい 車を。

現在、何らかの理由で、**十分なお金を持っている(手に入る)可能性がある**。従って、新車が欲しいという**願望は実現の可能性**がある。

### 仮定法 …… 絶対に起こりえない仮定・願望を述べるときの言い方

現在なのに過去形で、過去なのに過去完了で表す。

- ② If I had enough money, I would buy a new car.  
(もし～ならば 私は 持っている 十分な お金を, 私は ~するだろう 買う 1つの 新しい 車を。

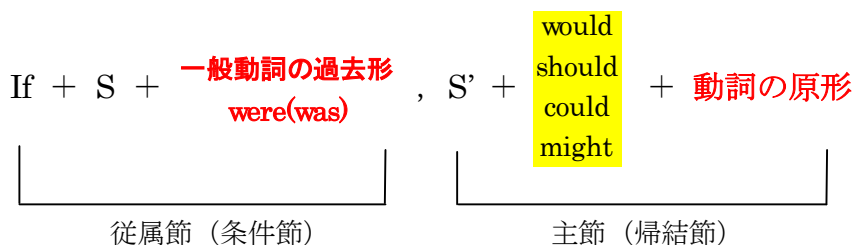
現在、何らかの理由で、**十分なお金が入る可能性が全くない**。従って、新車が欲しいという**願望は実現の可能性がない**。

なお、文中の had, would はともに「現在」として訳してある。これについては3ページで。

# 1. 仮定法過去

**仮定法過去** …… 現在において、絶対に起こりえない仮定・願望を述べるときの言い方

仮定法過去は「**名ばかりの過去**」である。現在のことを言っているにもかかわらず、過去形が使われているからだ。



- 仮定法では、従位接続詞 If 以下の従属節を**条件節**(条件を表す節)、主節を**帰結節**(結果を表す節)という。
- 仮定法過去において、
  - ・ 条件節の動詞は過去形を用いる。
  - ・ 帰結節の助動詞も過去形を用いる(条件節に if が使われていない場合、主節に助動詞の過去形が用いられないものもある)。

上でも述べたが、だからと言って**過去のことを表しているのではない**。形は過去でも、**内容は立派に現在である**。だから、**仮定法過去の文中の(助)動詞を過去に訳してはならない!**

- 後で詳しく述べるが、仮定法は「別世界の話」である。直説法と明確に区別するため、
  - ・ 条件節の**動詞**(過去形)の意味を「万が一～する」
  - ・ 帰結節の**助動詞**(過去形)の意味を「ありえないことだが～だろう」(would の場合)とする。

ア. If I **were** a bird, I **could** **fly** to you.  
～なら 私が 万が一である 1つの 鳥, 私は ありえないことだが～できる 飛ぶ ～へ あなた。

イ. If she **loved** me, she **would** **accept** my proposal.  
～なら 彼女が 万が一愛する 私を, 彼女は ありえないことだが～するだろう 受け入れる 私の 求婚を。

ウ. If it **were not** for your help, he **would** **fail** again.  
～なら (それが) 万が一ではない ～のために あなたの 手助け, 彼は ありえないことだが～するだろう  
失敗する 再び。

エ. I wish I **had** enough time.  
私は 切望する 私が 万が一持っている 十分な 時を。

オ. He talks as if he **knew** everything.  
彼は しゃべる ～として ～なら 彼が 万が一知っている 全てのことを。

- 例文アのように、仮定法過去の条件節の be 動詞は、**主語にかかわらず were を用いる**のが原則である(口語では主語に応じて was も可)。
- 帰結節(主節)の助動詞は4通りもあるが、「**場面によって使い分けなければいけない**」**という掟はない**。would, should, could, might のいずれを用いるかは、ほとんど気分の問題である。迷ったら全部 would でも一向に差し支えない。
- 見ての通り、例文ウをスラスラ流で訳するのはツライ。for ～「～のために」はこの場合「～を求めて」とし、「万が一(それが)あなたの手助けを求めてという状態でなかったなら」となる。  
If it were not for ～ で「万が一～がないなら」とセット扱いした方が分かりやすいだろう。

定番ともいえるべき同じ意味の文として、次のようなバリエーションがある。

If it were not for your help, he would fail again.

Without your help, he would fail again.

But for your help, he would fail again. (but for は文語)

- 例文エの主節は I wish。仮定法でありながら動詞が現在形である。条件節に現実味がなくても「強く願う」ことは可能だからだ。ただし、どんなに切望しても実現の可能性はないので、切望の内容を表す I wish 以下の節でのみ、仮定法が用いられる。
- 例文オの主節は He talks。エと同様、動詞は現在形。as if 以下の節に現実味があろうとなかろうと、彼から「しゃべる」権利は奪えまい。

as ～で「～として」。「if he knew everything として」ということは「万が一彼が全てのことを知っている(ことを前提)として」。

ふつうは、as if ～ で「(まるで)～であるかのように」とセット扱いされる。

同じ意味の文として、

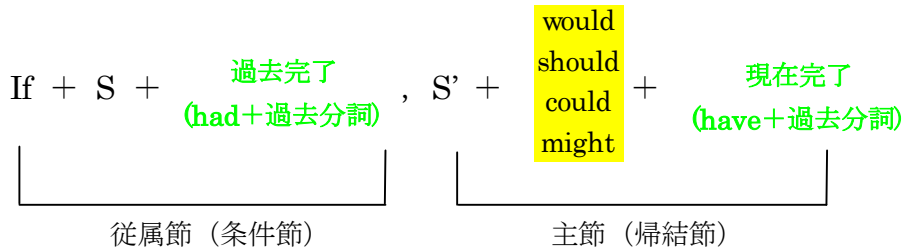
He talks as if he knew everything.

He talks as though he knew everything.



## 2. 仮定法過去完了

仮定法過去完了 …… 過去において、絶対に起こりえなかった仮定・願望を述べる時の言い方



過去完了は「had + 過去分詞」という形。「過去分詞で表された事実が、過去のある時点よりもさらに古い過去に起こった。それを過去のある時点で(大事に)持っている」という表現である。

加えて、過去完了は「大過去(過去よりもさらに古い過去のこと。それにしてもベタなネーミングだ)」を表すことがある。仮定法過去完了における「過去完了」は「大過去」のことである。

仮定法過去は、現在のことを言っているにもかかわらず、過去形を用いる。

仮定法過去完了(大過去)は、過去のことを言っているにもかかわらず、大過去を用いる。

このように、

**仮定法では、そのときのことを、常に一つ古い時制を用いて表現するのだ。**

仮定法過去完了(大過去)は「名ばかりの過去完了(大過去)」である。

- 条件節は何の制約もなく過去完了を用いることができる。では、助動詞の過去形を使った帰結節はどうするか？  
助動詞そのものは過去形よりも古くすることができない。しかも、後には「動詞の原形」という制約があるから had を用いた過去完了は使用不可。それでも、過去よりも古くしたい…。どーする？

仕方がない。助動詞の過去形の後を**現在完了**にしてしまおう。現在完了自体は「現在そのもの」なのだが、過去の内容も含んでいるからこれで我慢しよう。  
その結果、6 ページのようなパターンが生まれた。

- 仮定法過去完了の文の意味を考えると、3 ページにならって、
  - ・条件節の**過去完了**は過去とみなし、「**万が一～した**」
  - ・帰結節の**助動詞**(過去形)は文字通り過去とみなし、「**ありえないことだが～した**だろう」(would の場合)、後の現在完了は原形とみなす。

仮定法 過去	過去形 → 現在形とみなす 「万が一～する(～である)」	助動詞過去形 → 現在形とみなす 「ありえないことだが～する」
仮定法 過去完了	<b>過去完了</b> → 過去形とみなす 「 <b>万が一～した(～だった)</b> 」	<b>助動詞過去形 + 現在完了</b> → 現在完了 を原形とみなす 「 <b>ありえないことだが～した</b> 」

とする。煩雑な処置だが、**直説法よりの1つ古くなった時制をリアルタイムに合わせる**という点で、一貫させざるをえなかった。  
なじめない人は、表の  部分をセット扱いして意味をとらえてください。

ア. If it **had been** fine yesterday, I **might**  
 ～なら (それは) **万が一だった** 晴れの 昨日、 私は **ありえないことだが～した**かもしれない  
**have gone** fishing.  
 行く 釣りに。

イ. If she **had loved** me then, she **would**  
 ～なら 彼女が **万が一愛した** 私を そのとき、 彼女は **ありえないことだが～した**だろう  
**have accepted** my proposal.  
 受け入れる 私の 求婚を。

ウ. If it **had not been** for your help, he **would**  
 ～なら (それが) **万が一ではなかった** ～のために あなたの 手助け、 彼は **ありえないことだが～した**だろう  
**have failed** again.  
 失敗する 再び。

エ. I wish I had had enough time.

私は 切望する 私が 万が一持っていた 十分な 時を。

オ. He talked as if he had known everything.

彼は シャベった ~として ~なら 彼が 万が一知っていた 全てのことを。

- アの例文を読めば、仮定法過去完了が「過去においてありえなかった仮定・願望」そのものであることがお分かりいただけると思う。  
イ、ウも状況は4ページと同じ。4ページでは現在のことを、7ページでは過去のことを述べている。
- ウの It had not been for ~は「万が一~がなかったなら」とした方がわかりやすい。
- エ、オは、いずれも4ページのエ、オの「仮定法過去完了バージョン」である。





## 仮定法の謎に迫る！！

### 謎 その1 「なぜ、仮定法は1つ古い時制を用いるのか？」

何度も述べたが、仮定法過去は、形は「過去」であるにもかかわらず内容は「現在」。

仮定法は、「現実には起こりえない仮定・願望」を述べるときの言い方である。文中の動詞が表す動作(状態)から現実味をなくすにはどうすればよいか？

- ① 「**実現の可能性がないこと**」は「**とり返しのつかないこと**」と同列に語ればよい。「現在」の時点できりかえしのつかないことと言えば「過去」。一つ古い時制にするのはそのためだ。

このような現象は日本語でも起こっている。仮定のことを言うとき、「明日晴れたら」、「今日ヒマだったら」のように、**過去・完了の助動詞「た」**を用いる。

ただし、日本語には直説法・仮定法の区別がない。あくまで推測だが、日本語にも実現の可能性がないことを一つ古い時制で語る発想があったのではないか？ 「もし今、彼が生きていたら…」という表現には無念さがにじみ出ている。このような言い方が、実現の可能性にかかわらず使われるようになったのではないか。

- ② **現在、その仮定や願望が起こりえない原因を過去に求める**。例えば、私の塾の事務室は收拾がつかないくらい散らかっている。「もし事務室が整頓されていたなら…」この願望は実現されない。しかし、以前からキッチンと整理整頓を怠らなければ、仮定は成り立つのだ。

「私が鳥だったら」もそう。鳥類に生まれていれば、願望は満たされるのだ。

このように、**1つ古い時制において、こーゆーことが起こっていれば、そのときの欲望が満たされる**。これが最大の理由であると考えている。

なお、仮定法過去において、be 動詞が were に統一された理由については、ハッキリとした理論を打ち出せなかった。今後の課題としたい。ごめんなさい。

## 謎 その2 理由はともかく、なぜ動詞の時制と実際の時制が異なる表現がまかり通るのか？ 混乱はしないのか？

英米人は混乱しない。納得できずに困っているのは日本人の方である。理由は、何度も述べたように、**日本語には假定法が存在しないから**。

直説法は「現実の世界」。假定法は、事実に反する、いわば「空想の世界」だ。夢と現実の区別が付かない人は数多く存在するが、少なくとも日本人より英米の方がそういう人は少ないだろう。なぜなら、**彼らは現実を語るときと空想を語るときは直説法・假定法の切り替えをするからだ**。

SF に代表される空想の世界は、現実とは別の世界である。別の世界には「**その世界のルール**」というものが存在する。それが「**時制**」に現われるのだ。

	現在のことを…	過去のことを…
現実の世界（直説法）	現在形で語る	過去形で語る
空想の世界（假定法）	過去形で語る	(過去)完了時制で語る

混乱するどころか、**1つ古い時制で表すのは、空想世界のルールなのだ！**

最後に。

もし日本語に「假定法」があったなら、太平洋戦争は起こらなかつたらう。

「アメリカに勝ったら…」。これは空想を通り越して「妄想」である。当時の政治や軍部の中枢にいた人たちで、日米の国力・軍事力の絶望的な差を認識できない人はいなかったらう。

開戦の是非を問う議論において、直説法で語る人は一人もいない(陸軍の強硬派の連中はその限りではないかも知れぬ)。そもそも、対米戦について論じる前に、直説法・假定法のどちらで語るのかを考慮しなければならないのだから、実現の可能性を考えないわけにはいかない。

すると、全員が「假定法」で話すことになる。誰一人、実現の可能性を信じていない。これでは議論にならないだらう。

…これは私が勝手にでっち上げたシナリオだが、英語を突き詰めて学習することの意義が、少しでも皆さんに伝われば幸いである。